

文化と言葉の楽しさ

島根県立島根女子短期大学教授

かの
狩野 キャロライン・
エリザベス

窓の前にある机の椅子に腰を下ろします。窓の外へさり気なく顔を上げてみると、青々と茂った杉の木々の枝を通して、お日様が暖かく光り照らしています。正に爽やかな秋のお昼下がりの「文化の日」であります。今まで読んでいたイギリスの詩集をそっと閉じ、パソコンの画面に向かって、心のペンを取ります。じつに「読書の秋」、「芸術の秋」のような気持です。また、想像して、夕飯の香ばしい秋刀魚やマツタケが頭に浮かんでくると言うまでもない、「食欲の秋」でもあります。

先日、ある銀行に勤めておられる卒業生と久しぶりに会い、似合いの制服が夏のと違うとコメントすると「はい、今は秋ですから。そう言えば、先生、「衣替え」は、英語で何と言いますか」と聞き返されました。なるほど、いい質問です。イギリスでも、夏の前に冬用のコートをしまい、次第に再び寒くなると、取り出すのですが、夏の間でもお天気が変わりやすく、夕方も涼しくなるので、完全な「衣替え」はありません。言葉自体が存在しませんので、訳せないのです。卒業生の制服に関しては、せいぜい「summer uniform」は、「autumn uniform」ぐらいになります。

今日の「文化の日」にしても、元の由来は憲法の設立にあることは別として、学校や公民館などで、全国的に文化的活動が行われているこの日や時期が、実際にはイギリスには

ありませんが、少なくとも「Culture Day」に訳すことが出来ます。また、食欲の秋と秋刀魚などの美味しい季節というような関連や連想などもなく、「秋刀魚」のような言葉がもつニュアンスなど訳せません。「秋刀魚」を和英辞典で調べると、何らかの名前や英訳が載っていても、見たことも、食べたこともない英語圏の人には、実際のをイメージできません。やはり、伝統や習慣、また植物、魚、食べ物などがその国に存在するからこそ、それに相当する言葉が存在し、異なる文化に基づいている言語は、訳すのに苦労します。

それでは、どう訳せば良いのでしょうか。いつか、日本文化をもっと知ってもらい、futon やtofuのように、その言葉自体が英語になることを願いながら、最終的に、説明的な長い英訳するしかすべがありません。現在、私は、ある新しい和英辞典のチームに加わり、日本語の英訳に取り組ませて頂いていますが、これは、いかに工夫していい訳ができるかの、限りのない楽しいチャレンジになっています。

これからは、益々寒くなり、やがて、殆ど例外なく、日本の各家では、「炬燵」を出す季節がやってきます。「この「炬燵」を、英語では、いったいどう説明しますでしょうか」と授業でよく学生たちに挑戦してもらっていますが、私の大好きなテーマである「文化と言葉の楽しさ」を示す典型的な一つの例です。